



館長だより

バオバブ



バオバブの木は「生命の木」とも呼ばれ、アフリカやマダガスカル、オーストラリアに広がる象徴的な存在です。その巨大な幹に水を蓄え、数千年に及ぶ寿命を誇り、文化・伝説・科学の交差点に立つ木でもあります。また、バオバブの木はアフリカのサバンナを象徴する存在であり、その姿は一度目にすれば忘れられないほど特異です。太い幹と、まるで根を逆さにしたように広がる枝ぶりから「逆さまの木」とも呼ばれ、乾燥地帯において人々と動物の命を支える水瓶のような役割を果たしてきました。近年では「生命の木」として観光や文化の象徴ともなり、文学や芸術にも繰り返し登場するようになりました。

ではまず、その生態的特徴に注目してみましょう。バオバブはアオイ科バオバブ属 (*Adansonia*) に属し、アフリカ大陸、マダガスカル、オーストラリア北部に分布します。幹の直径は 10 メートルを超えることもあります。内部は空洞化する場合があります。そしてその幹には最大で 12 万リットルもの水を蓄える能力があり、乾季には人々や動物にとって貴重な水源となっています。葉は乾季に落葉し、雨季に再び芽吹きます。花は白く大きく、夜に咲いてコウモリによって受粉されることが知られています。果実は「モンキープレッド」と呼ばれ、ビタミン C やカルシウム、鉄分を豊富に含み、食料や薬用資源として利用されました。

次に、その文化的・歴史的背景を見てみましょう。バオバブの名は 16 世紀に北アフリカを旅したイタリア人植物学者が「バ・オバブ」と記したことに始まり、語源はアラビア語の「ブー・ブーブ（種がたくさんあるもの）」に由来するとされています。アフリカの諸言語では、ズールー語で「ウムコーモ」、ス

山形県産業科学館

令和7年11月30日(日)

発行 館長 加藤智一

ワヒリ語で「ムブユ」など、地域ごとに異なる呼称を持ち、人々の生活に深く根付いています。村落では会議や儀式の場としてバオバブの木陰が利用され、幹の空洞は倉庫や礼拝所としても活用されました。

文学においてもバオバブは象徴的に描かれてきました。サン=テグジュペリの『星の王子さま』では、バオバブは小さな惑星を覆い尽くす脅威として登場し、日々芽を抜かなければ星を飲み込んでしまう存在として描かれています。この寓話的な描写は、バオバブの旺盛な生命力と、人間が自然とどう向き合うべきかという問いを投げかけているかのようです。

さらに、科学的研究も進んでおり、近年の遺伝子解析によって、バオバブの起源はアフリカではなくマダガスカルにあることが判明しました。そこから海流に乗って種子が拡散し、アフリカやオーストラリアに広がったと考えられています。この発見は、植物の分布と進化の歴史を考える上で重要な手がかりとなっています。

また、バオバブの木は、長寿の象徴でもあります。南アフリカには樹齢 6,000 年とされる個体が存在したと伝えられています。その寿命は人間の歴史を超え、文明の興亡を静かに見守ってきました。こうした長寿の木は、地域社会にとって精神的支柱であり、神話や伝説の中で「祖先の木」として語られることがあるそうです。

しかし、現代においてバオバブは危機に直面しています。気候変動による乾燥化や森林破壊の影響で、多くの古木が枯死しつつあるのです。絶滅危惧種に指定される地域もあり、その保護は生物多様性の維持にとって極めて重要です。バオバブは単なる景観の一部ではなく、地域の生態系を支える要であり、未来世代に伝えるべき自然遺産でもあるのです。

